

出版5社のコミックにRFIDラベル

PubteX 「BOOKTRAIL」商用サービス開始

(株)PubteX(東京都千代田区内神田、渡辺順社長、☎03・5228・0562)はこのほど、RFIDを活用した書籍トレーサビリティシステム「BOOKTRAIL」の商用サービスを開始した。書籍に装着されたRFIDタグ・ラベルを活用し、出版物の流通状態を可視化する。同社は先行して2023年8月から、出版社3社にRFIDタグの供給を開始し、新刊コミックを対象に貼付。今回、パイロット運用を経て書店向けと出版社向けの機能をまとめた運用パッケージの正式な提供に着手する。

トレーサビリティ確保で配本・返本最適化

PubteXは22年3月に商社の丸紅と丸紅フオレストリンクス(株)、出版社の(株)講談社、(株)小学館、(株)英社で設立した企業。AIやRFID技術を活用した出版界全体の活性化に資するサービスを提供する。同社の主たる事業内容は「AI発行・配本最適化ソリューション事業」と「IoTソリューション事業」。



RFID タグ・ラベルをコミックに装着していく

出版社・書店・販売会社の枠を超えたプラットフォームを構築しサービスを提供することで出版流通のDXを推進、最適化を目指す。前者は、種々のデータを横断的に活用したりAIを運用したりすることで返本率の低減を狙う。書籍で33%、雑誌では40%超とされる返本率の改善を図り、業界サプライチェーン全体

の効率化を支援する。

また後者は①RFIDタグ・ラベルのデータ閲覧サービス(クラウド)②読み取りデバイス、などを提供する。出版物にRFID

23年発表のある統計では、返本率が書籍で33%、雑誌では40%超を記録。いかに非効率で経済的なロスが発生しているかを示している。他方書店経営も非常に厳しく、馴染みの光景だった書店が街から消える事態が全国で生じている。

こうした状況をどうにかしたい。そこでデジタルの力を活用して在庫の可視化や業務の効率化を図り、効率化した分のお金を厳しい部分に落として循環させていく。

出版流通のDX化を支援し新たな流れを創り出すのが当社の使命だ。そのための施策として、一つはAIを使い発行部数、配本パターンを最適化する新規ソリューションを

すもの。書籍の個品管理を通じて「なにが」「どこで売れたのか」の履歴を収集する出版流通の新たなデータ基盤の整備を図る。これに関わるRFIDシステムやアプリをサブスクリプションで提供していく。

小学館、講談社、集英社、KADOKAWA、一迅社の5社はコミックの新刊にRFIDタグの装着を実施しており、その他コミック系出版社においても開始する動きが始まっている。他

市場投入する。もう一つはRFIDの活用。現在全然追跡できていない書籍の動きを捉え、データの蓄積を図り運用していく。RFIDタグの装着には粘着テープが使われている。主流の貼付方法は「しおり型」。台紙にRFIDラ

店舗での「出会い」、これから

PubteX IoTソリューション事業部担当者コメント

RFIDラベルを直接貼付するやり方を追加採用。製本工程に追従するため、1時間に1万枚の貼付が行える高速型ラベラーを使用している。こうした書籍の動きを可視化するインフラ整備を週間に一度のペースで実施いただいている。台

3(裏表紙のウラ面)にRFIDラベルを直接貼付するやり方を追加採用。製本工程に追従するため、1時間に1万枚の貼付が行える高速型ラベラーを使用している。こうした書籍の動きを可視化するインフラ整備を週間に一度のペースで実施いただいている。台

方大垣書店や有隣堂ら6書店10店舗で運用を進行中。書籍のトレーサビリティ確保など、DXで出版流通の課題解決を支援していく。

でアラームを鳴らす防犯への応用も可能。パイロット運用先の店舗では、RFIDラベルの貼付前と貼付後で盗難冊数・被害額とも8割以上の削減を実現した。これら共通インフラを整備されると、書店はもとより出版社側もサプライチェーン上も含む今の在庫数をリアルタイムで把握可能に。現在の高い返本率は、実数が見えないから作り過ぎ、結果戻ってきている。適材適所に配本できるようにすれば、売れる所にきちんと数を届け、売れない所には必要数だけ送れる。DXで店舗をよい品揃えとし、ネットでは味わえない「本との出会い」をこれからも守っていききたい。